

# 松原再生シンポジウム

日曜討論

海岸線を彩る全国の白砂青松に、異変、が起きている。松くい虫の被害や広葉樹の侵入、人も手をかけることが少なくなった。国の特別名勝・虹の松原がある唐津市の市長らが東京大学で意見交換した「日本の松原再生シンポジウム」(日本緑化センター主催)。消失の危機に見舞われている日本の松原の再生を探った。(辻村)

日本列島松原廊構想を披露する瀧邦夫・日本緑化センター企画広報室長  
＝東京大学弥生講堂



日本緑化センター企画広報室長 瀧 邦夫さん

白砂青松はわが国を代表する原風景の一つ。固有の緑の文化をほぐみ、国民

## 日本列島松原廊構想

誰かが愛着を感じられる松原が衰退の危機にある。松原再生運動はその保全の重要性を広くPRし、活動に取り組み人々たちを支援、次代を担う子どもたちが松に親しむ機会をつくるのが狙いである。

## 再生運動で地域も元気に

松原が衰退した原因は外

国から侵入した病害、マツ材線虫病が全国にまん延したためだ。さらに松原から人々の足が遠のいてしまった。被害木を放置し、松葉かきがなされず、広葉樹が

の関係を再生する運動を提案する。松原には三つの資源価値がある。地球温暖化防止や津波など防災機能の環境資源、観光資源、高齢者が散

になることを目指している。このため三つのモデル事業に取り組み。白砂青松百選に選ばれた松原の地元と、日本緑化センターが協力し、再生計画、活動方針をまとめ

文社会科学の分野から松原を幅広くとらえ、研究活動の母体となる「松アカデミー」を創設したり、松原応援団も結成する。各府庁の事業連携を図り、「松原の日」を公募で設け、PRを強化する。

進士 今日松原と日本文化をテーマにしている。能舞台には立派な老松が描かれていますね。観世 松なしで能は考えにくいし松でないと困る。自然の松に関心を持ったのは一九五〇年代半ばごろから。広島近くで松を眺めていたら、突然、たくさん枯れているのを見て驚いた。黄砂のせいかなどと考え、どこにかしいなと思っ

で、老松は長寿の印。松に癒やされるのが多く、人間が生きていく上で健康や生活にかかわりがある。松を見ると安心し、うれしくなる。

て宝物の実感がないかもしれない。宝を自覚しても受け身で守っていくだけだったり、文化遺産としてたてまつるのではなく、この宝を生かすことで現代の文化が育つと思う。

間がつくった風景で最大のものが海岸の松原。人がつくったからこそ愛情豊かです。松くい虫をどう駆除していくかと、子どもや地域の人がどう松原をどう守っていくかが再生のキーワードであり、大きなテーマだ。

いといけない。年一回空中散布する薬剤一つにしても地元の声を森林管理署などにしっかり伝え、対応している。

- パネリスト
- 観世 榮夫さん (能楽師)
- 小林 富士雄さん (大日本山林会会長)
- 坂井 俊之さん (唐津市長)
- 関 正雄さん (日本経団連自然保護協議会企画部会委員)
- 三沢 英一さん (万里の松原に親しむ会長 山形県酒田市)
- 三戸 久美子さん (松保護士、NPO法人樹木生態研究会副代表理事)
- ◎コーディネーター
- 進士 五十八さん (東京農業大学教授、前学長)

# 白砂青松に“異変”

日本の松原再生運動へ向け、唐津市長らが意見交換し、約210人が聞き入った「日本の松原再生シンポジウム」＝東京大学弥生講堂、4月28日



松くい虫にやられると赤くなる。木の声を一本一本聞きながら対応していくかな

ドだ。(3面に続く)

# 日本の原風景守れ



三沢 英一さん 関 正雄さん 坂井 俊之さん 小林 富士雄さん 観世 榮夫さん



三戸 久美子さん



進士 五十八さん

進士 次は産業界の取り組みを。  
(2面から続く)

関 経団連では地球温暖化防止、循環型社会の構築、自然保護などの四つを重要課題としている。各社の自然保護の取り組みの情報を共有化したり、東南アジアを中心とした自然保護プロジェクトを支援している。何もしないで放っておくのも一つだが、ある程度手を加えながら自然を守っていくスタイルもある。そこにビジネスの力を発揮できる。資金協力にとどまらず、各企業の技術、ノウハウ、人材の提供である。

## 観世 松くい虫被害心痛む

## 小林 先人が残した「宝物」

松くい虫被害は心痛む。先人が残した「宝物」を守りたい。活動の中で松原の歴史をあまりにも知らないことに気付き、文献を調べ、先輩に話を聞いて記録集を作った。調べながら、三百年前に松尾芭蕉が歩いたこと

## 関 企業の技術、人材提供

## 坂井 住民一丸キーワード

会は二〇〇一年に発足、年三、四回剪定を始めた。昨年は七十九日間活動。一年一年積み上げてボランティアの歩みを進めてきた。地域の子どもたちと一緒に活動しようと「自然観察教育林地区」をつくり、植林経験ができるようにした。活動の中で松原の歴史をあまりにも知らないことに気付き、文献を調べ、先輩に話を聞いて記録集を作った。調べながら、三百年前に松尾芭蕉が歩いたこと

も初めて知った。先生たちにも知ってもらおうと事前学習の現地視察を繰り返している。学校や教育委員会と話し合い、先生活協力を得ないと長く続かない。森林組合やボランティアが補佐する体制を抜きにしては、子どもたち

の実践活動はできない。三戸 自分と松のつながりを考えてみた。子どものころ、マツタケ狩りに行って一つも採れなかった経験があるが、そのときはマツタケがないということとどまり、アカマツ林の状態を抜きにしては、子どもたち



国の特別名勝・虹の松原

## 三沢 子どもらと植林活動

## 三戸 保護意識まず育てる

**記者の目**  
近日常の風景が、松と人の関係近づけて、私たちアカアカデミーに積極的に参画してほしい。  
江戸時代から人と自然の共生のもとに、はぐまれてきた白砂青松。百年後もその美しさを保つためには、今からの積み重ねが欠かせない。(辻村圭介)

った。意識のある人はいいが、生活の中で松と自分とのつながりが見えていない人たちが多かった。この人たちにいろんな切り口で保護への意識を伝えていく必要がある。そして情報を得て何かしたいと思ったときに、具体的に何をすればいいのか、市民活動につなげていく工夫をしていくと、松とのつながりを持って保護活動にかかわってもらえるのではないかと。進士 四季折々の変化が楽しめるのは、どうしてとした松の緑があつてこそ。目立つ松や紅葉だけ写し、日本の景観を引き締めている力強い松にはだれも見向きもしない。派手に立ち回るものしか目に付かない。考え直さないといいない時代ではないか。  
日本の文化と言ったときに、芸術や芸能文化になりがちだが、生活、食、環境、都市など、松は日常生活、暮らしに身近なものだった。狭い分野でとらえず、生活全般に広げていき、それが松のファンを増やし、欠くべからざるものだとみんなが感じてくれるものになる。松原再生は人間再生かもしれない。